

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 75 (11) は, Regular Article が 2 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Regular Article

Widespread and interrelated gray matter reductions in child sexual offenders with and without pedophilia : Evidence from a multivariate structural MRI study

*M. S. Klöckner**, *K. Jordan*, *K. A. Kiehl*, *P. Nyalakanti*, *C. L. Harenski*, *J. L. Müller*

*1. Forensic Psychiatry and Psychotherapy, Clinic of Psychiatry and Psychotherapy, University Medical Center, University of Göttingen, Göttingen, 2. Research Department Transnational Politics, Peace Research Institute Frankfurt, Frankfurt, Germany

小児性愛を伴うか否かにかかわらず小児性犯罪者において広範囲にわたって互いに相関を示す脳領域における灰白質容積の減少：構造的 MRI の多変量解析による研究から得られたエビデンス

【目的】統計学的検出力の低下を最小化するため, 多変量解析法を用いて小児性犯罪に関する神経解剖学的相関を進め, 小児性愛に関する神経相関から小児性犯罪を明らかにすること。【方法】本研究では, 収監中の男性集団 (小児性愛の小児性犯罪者 22 名, 非小児性愛の小児性犯罪者 21 名, 対照である性犯罪以外の暴力的犯罪者 20 名) を対象に, ソーススペースの形態計測を用いた全脳多変量解析法に基づき, 灰白質の構造 MRI に関する知見を提示した。【結果】両小児性犯罪者群では, 対照群に比べて, 互いに相関を示す脳領域における灰白質容積の減少が認め

られる複数の神経解剖学的領域のネットワークが同定された。これらのネットワークは, 両側小脳および両側前頭葉における広範なクラスター, ならびに両側頭頂葉, 両側側頭葉, 両側後頭葉, 両側基底核, 内側帯状皮質および海馬におけるより限局的なクラスターから構成されていた。【結論】本研究結果から, 小児性愛それ自体と関連なく, 小児性犯罪者は, 互いに相関を示す脳領域, すなわち可能性として, 互いに連結する脳領域における構造異常を有するという解釈が提起される。今回のデータに関する解釈および限界を考察し, 今後の研究に求められる推奨事項を提示する。

Regular Article

Cost-effectiveness analyses of augmented cognitive behavioral therapy for pharmacotherapy-resistant depression at secondary mental health care settings

*M. Sado**, *A. Koreki*, *A. Ninomiya*, *C. Kurata*, *D. Mitsuda*, *Y. Sato*, *T. Kikuchi*, *D. Fujisawa*, *Y. Ono*, *M. Mimura*, *A. Nakagawa*

*1. Department of Neuropsychiatry, Keio University School of Medicine, Tokyo, 2. Center for Stress Research, Keio University, Tokyo, Japan

精神科専門医療機関における薬物療法抵抗性うつ病に対する認知行動療法の増強療法の費用対効果分析

【目的】薬物療法はうつ病の主要な治療戦略である。しかし, うつ病患者の 3 分の 2 は, 初回の抗うつ薬治療後も症状が寛解に至らないことがわかっている。精神科プライマリ・ケアでは, 薬物療法抵抗性のうつ病に対して, 認知行動療法 (cognitive behavioral therapy : CBT) の増強療法が有効で, 費用対効果も高いことがわかっている。精神科専門医療機関における CBT の

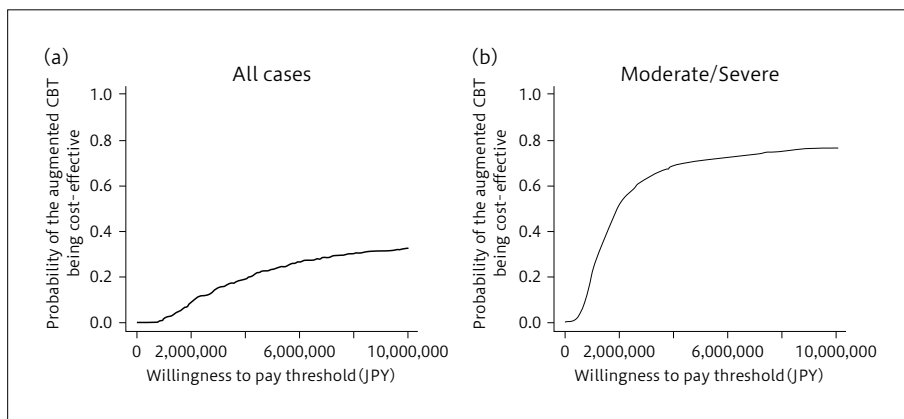


Figure 2 Cost effectiveness acceptability curves of the base-case analysis with (a) all samples, and (b) the patients with moderate/severe depression
(出典：同論文，p.347)

増強療法についても、われわれはその臨床効果を報告しているが、費用対効果についてはいまだ評価されていない。そこで本研究では、精神科専門医療機関を受診する薬物療法抵抗性うつ病に対して、通常治療（treatment as usual：TAU）に加えてCBTを増強した場合と、TAU単独の場合の費用対効果を明らかにすることとした。【方法】大学病院精神科と精神科専門病院（各1施設）でうつ病治療を希望する80名のうつ病患者を対象とした無作為化比較対照試験のデータを用いて、64週時点での費用対効果を分析した。費用対効果は、費用と質調整生存年（quality adjusted life years：QALY）、その他の臨床尺度の差を両群間で比較した増分費用対効果比（incremental cost-effectiveness ratio：ICER）で評価した。【結果】薬物療法抵抗性う

つ病の全サンプルのICER、および中等症・重症サンプルのICERは、それぞれ-15,278,322円、2,026,865円であった。受容曲線から、CBTの増強療法が、457万円（3万英ポンド）の閾値において費用対効果的である確率は、全サンプルの場合0.221、中等症・重症の場合0.701であることが明らかとなった。感度分析では、中等症・重症のうつ病にサンプルを限定した場合、結果が頑健であることが明らかとなった。【結論】精神科専門医療機関を受診する薬物療法抵抗性うつ病に対するCBTの増強療法は、軽症を含むすべてのサンプルを対象とした場合は費用対効果が見込めないが、中等症・重症の患者に対しては費用対効果が高いことが示された。

ゆらゆらとしたいくつもの線が重なりながら集まっている。それぞれの線は、長いようでもあるが、短めの筆触がつながっているようでもある。縦方向の線がほとんどであるが、いくつかの場所では横方向の線も見える。

作者の澤井は、しばしば写真を見ながら制作をする。彼女は、どこかに行きその場所が気に入ると、同行している家族やスタッフに撮影を依頼するのだ。この作品もそのひとつで、秋の宇治川を訪れた際の写真をもとにしている。紅葉シーズンだったことが、この作品の広い部分を赤が占めていることの原因かもしれない。赤に比べると色濃く描かれている緑や青も、それぞれ川の景色を構成する色である。川の景色が澤井の意識のフィルターを通すとこのように変換されるのか（還元的な抽象）、あるいは、紅葉のなかの川を見た時の情感から出発してそれをイメージ化したものなのか（構成的な抽象）、それはわからない。けれども、彼女の作品には凜とした強さがある。絵画において伝統的な技法である oil on canvas を使いこなしているのも興味深い。この「雰囲気」を出すために、絵具を相当多量の油で溶いているはずである。

作者の澤井は、奈良県にある、障害者の芸術活動などを支援する「たんぼぼの家アートセンター HANA」という施設で、主に日中、制作をしている。一日あたりの制作時間は長くはなく、Uji River にも約2ヵ月がかけられた。ピアノを弾くことを趣味としており、シューマンの「楽しき農夫」やブルクミュラーの「貴婦人の乗馬」などの楽曲に基づくシリーズも制作、ここでは和紙を支持体とし、黒い墨を用いた、点と線によるリズムカルな構成が実現している。

(保坂健二郎, 滋賀県立美術館)



タイトル : Uji River

作者 : 澤井玲衣子 (SAWAI Reiko)

制作年 : 2010

素材 : 油彩, キャンバス

サイズ : 606×727 mm